新編水滸畫傳

二編

六

875
16

青面獸楊志

特
別
875
16
巻

新編水滸畫傳卷之拾六

東武　高井蘭山　翁　譯編

明治三年

○青面獸宝珠寺を雙棄れ曹正が謀計に陥ひ魯智深と楊志と合戦し。宝珠寺を雙奪んとす。

翌日は又更の時に起て食を吃し了られば曹正乃ち小舅の後生及び六七人の一人と復一智深楊志を引て二龍山へ急行に。其日午の下刻林の内ふ到る。別活索を以て智深を縛め。二人の仆民に縋を乞しむ。楊志は仆民の姿に歩扮て懐中ふ朴刀を蔵し持て曹正に対ひ曹正が小舅及び仆人ふを率し自ら智深が後杖を持て来ふ二竜山の麓に至て三つの冥を登る。ふ漁鉄鏡石砲ふを以面八方ふ倚へ防禦厳格す。ふ時ふ緘冥の上に立て仆人ふが智深が絆を解て。飛がごと山陸ふ入て。ひゆを倚を

良久しうして。一人の獄目賣ふ上て。呼り問ていはく。汝等ハ何れの者ぞ。ハイ山ふ
まるや。又彼熙傷ハいうじて擒りるを。曹正善て。素〻ハ此山の近村ふ住し。酒肆
を賣て。產業とする者なるが。此熙傷素が居に來て。飽まで酒食を吃ひ。その償の錢
をも与ずして。一向罵てやるハ。梁山泊ようの人數を借して。二竜山を奪ハ。
序に汝が此村をも。悉く燒拂ふと。雨ぐ来〻詐て。再三酒を勧め。遂に
礫に案じて。是汝絆めゆへ。ようて。速に此熙傷を殺して。後の患を脫れしめよ。彼
孝叫の心を察しまひ。速に此熙傷を殺して。彼獄目これを聞て大ふ怒び。乃ち呼つて云ハ。汝ふハ先此孤に俟べし。我今大王
に報じ。少頃來ん。と。別賣を下て。直ちに山陣ふ入て。鄧龍ふ報と。報じ
ハ。鄧龍聲。これを聞て大に怒び。乃ち小喊ふ命じて云ハ。ハ〻熙傷を引て山陣に入
べし。我先彼が膝を切て。これを者に酒を飲ん。怒く。其の根を断さんと。躍起て掌

を拍ハ。小喊ふ命を承て。盡く賣上に出て。大ふ賣つを。乗さ乃曹正を奪て。山
陣に上る。曹正楊志ハ智深が左右ふ從て。山陣ふ到り。彼三ッの賣とるに。手險
阻なるを尋ねる。遠く遠辺の山嶺。まで。ハ〻ふ攀て。宝珠寺を高中ふ引。累むその
内ふ一條の路あり。山陣ふ上る。三ッの賣上るハ。槍長刀斧戟弓箭鉄銃石
炮ふを。幾ぞ。云數を知ず。嚴緻備へ列ね。刑仗緊さ防禦り。已に宝珠寺
の前に出て。此辺を。二ッの關門。恰も殘面のごとく。平地なり。を。遇遭ハ。
木柵を設て。陣を布。寨を結び。最堅固の要害。山門の下ハ。七八人の小喊
を並んで立が。智深が絆られるを見て。大ふ罵て云ハ。汝熙傷向ふ。我大王を
傷ひるが。今日遂ふ索を結て。山陣に到るハ。遂付汝が首を刎て。大王の仇
を報ずべし。智深これを聞て。更に怒ともに作さり。曹正楊志ハ智深を引て。
仏殿の上に到り。乃ち此所を見るに。中堂及び金剛神ふを。後に去て。殿の中

央ふ。虎皮の交椅を設け。前後左右より許多の小喽ふ。器械を持て立並ぶ。少刻あり。丈人の小喽。鄧龍を扶けて。殿中に到り。列鄧龍を縛て。交椅の上に坐とるさしむ。曹正楊志。智深が左右に侍て。已に階の下ふ到しつ。鄧龍智深を見て。大ふ罵て云るハ。汝恐偏我を踢倒し。已に小腹の上を傷ふて。手脚今に平ずゝ。汝今日又我にまゝ出る。時節わりや。智深眼を睜き。大ふ怒ていゝく。奸賊今我汝を殺さんふ。走ると雖とも。何ぞ奮く躍起られ。丈人の仁民。智深に勸さる活索を把て引解く。曹正又拐杖を船源ふ与ふ。智深是を受て風車のごとくふ揚し。忽ち鄧龍を捲んて。おて蹇る。楊志も同く力を拽て斬てうる。曹正及び小喽共に仁民ふも一度ふ吐と。器械を舉て進み来る。鄧龍ふ。ふく拐杖を舉て。只一打ふ撃られ。鄧龍の首を步碎て。交椅も微塵ふなり

ふ。時楊志ハ力を揮て。小喽六七人斬伏しゝ。敢て進んとする者一人も。曹正代絆を見て。大喜ふて。汝ふ迷ふ。ふて降参せよ。汝尚背く者めゝ。鄧龍を以て例とせん。小喽ふ是を聞て。大ふ慄き怨れ。寺前寺後紛と又六百の小喽。共に仁民人の眼目。悉く地上ふ跪て降参に。智深即小喽ふ命して。鄧龍が死骸を舁さしめ。庫の中に納る財宝を悉く查點て。封皮を貼。日を初として。智深楊志山陰のもとより。大に仍宴を設け。一山の小喽ふを集め。傳に飲敢を催し。毛日も酣美昏ふなりしゝ。曹正ハ丈人の豪傑ふ別れて。仁民等。私宅へ帰りり。是より二竜山蓋繁昌。老山の小喽ふ心を傾けて服せざるハなり。是ふ又那從辰の礼物を共さる。老幼管并に十一人の廂禁軍ふハ。病を日ふ續て。小京に逃げ。乃梁中書ゝ見えて。悉く増の下に伏し。偽て畏りれば。梁中書是を聞て云

魯智深林仲ニ於テ楊志ヲ逢迎ス仔し物語有後ニ編

鄧龍と
害し
宝珠寺
山陣の
主と
する

るゝ汝ホ遠路に馳て辛苦ホ堪。往來恙なくて偏ホ旅宿を勞せり。唯ちゝび。
楊提轄は何由なれば人齊く怒入て告るハ楊志ハ是恩を忘れ。
義を背く大賊なり。系ら爲に汴ふ系を離てより。七八日を經て黄泥岡ホ到り。
天氣甚だ熱うして四方皆林の内に到りて志ぐ〳〵歇る処に楊志私に七八
人の絨ホ内匿る処七人の絨詐て來る商人の形に扮乃七箇の車に乘て
載せ立て黄泥岡に上て休憩ひぬ時系〳〵甚だ渴し四方に酒を
覓で渴を止さんと酒賣より酒を買て皆く是を飲る処に豈知んや其酒の
内ホ蒙汗藥を入て是を飲て暫く須臾もせざるに忽ち眩暈して
昏倒。遂に地上に倒れ動さ働くこと能ハぬ楊志かの七人の來る商人と
作ホ礼物の財寶悉く奪取て擅に車に載て。遂に岡の麓ホ逃去ぬ系〳〵
日の黄昏ホ至て漸く毒藥消て手足動さ出る由なく遂起上て直ホ濟州府

に馳到り府ホ詣へ出て人の虞候に。濟州府に義金系〳〵十二人ハ殺を日ホ續
で馳回り乃ち相公に此事を訴へ出る。旅く人間らに是を奏ふして罪を知一度へ果
中書是を聞て大ホ驚き怒て云るハ。楊志大賊汝罪を犯して流人となりしを。
我格別に憐を蓋て獄を免け。遂に擢挙て人となせしに汝何ぞ恩を忘
れ義を背て此の如き不仁ホ及ンのことをるにや。我汝を捕へなバ身を斬ホ切ん
とて。列ち文書を認めて濟州府ホ送〳〵又書簡を綴へて侯ん太尉系の蔡太
師の方に送て礼物已に奪れるを告知せよう。使ハ足ホ信せ。乃を促る程
に自ら〳〵京の城下に到て。乃蔡太師に出へて書簡を呈に蔡太師已に
書札を披讀て大に怒て罵て云るハ。是らの賊徒ハ此て大膽に我婿梁中書
去年も已に幾ちく万貫の礼物を我ホ送て誕辰を祝せんとせ〳〵孔に盜賊
是を奪て今に未ダ方を知ず。彼ハ今年又かくのごく。傍ら吾人の振舞

とゐるとこゝ迄ハ迷ふ。若し是を急に捕へずんバ。恐らくハ後治め難からんと。

即日一通の文書を認て。一人の下役ハ指せ。直に濟州府に遣て。立地に此度の絨毯を捕へ。濟州府の府尹ハ。小京梁中書の文書を見てより。多く人を方々に分遣し。絨を捜し求れども。文に云ふ通り。亳の慮に忽ち知れの事を云ふハ。東京蔡太師より。文書到来して。使者已に廳前に来れり。府尹是を聞て大に驚き云ふハ。是必ず黄泥岡の盗絨ハ。我家の事なるべし。急ぎ使者に対面し。乃文書を披きて。果して黄泥岡の一件なりしが。府尹別使者に対して云ふハ。黄泥岡の絨ハ。我已に小京大名府虞候に訴へて。既に捕へ方々に捜索せしも。未だ手に入ず。絨を捜索せしも。未だ手に入ず。文書を見て。頂日ハ弥緊く。

役人に命じて。諸州諸郡に捕を弛緩く日限を究て是を捜せども。今に消息を聞て。是近くに消息を聞くことなしハ。我自ら蔡太師の方へ伺ひて。直に返答を乞べし。使者ハ。是ハ是蔡太師の憐を蒙る者なるが。此度の使を兼て。高地に赴く。亦前日東京を發足の砌。蔡太師自ら亦に命じて。濟州府に告て。十日の内に彼人の絨を捜索に逃軍楊志を捕へ。東京に送り。再三厳に是を命じ。もしなを十日の内に絨を捕へ。もしずんバ。府尹相公も責を負て頗る累ひを蒙り。亦罰を蒙て一命を保つこと難からん。府尹相公累を免れんとすれバ。是に又許多の逃捕を弛。十日の内に絨を捕へ。府尹是を受て大に驚き盗絨のことを嘗る。捕使の職を免ず。何濤と云ふ者の下に。是ハ。我前日汝と黄泥岡の辺に。絨を預置る処に。

今ハ旅て兎角の消息なしハ是慢の至極ニ何濤ハ云ふ京師日ごの命ゞを奉て
英泥黒の辺ニ出て探索し。是夜京の方を探索し。今
ひし事のこと評議せども。絨の来歴を知る人なれハ未ごを生所を知ず。
是素ハ急る事わるゝ。実にいんとも為ること。府尹是を聞て大ハに怒て云汝
何ぞかくのごとき云とるや。我熟思ふに。汝必ず急る処あり。故ハ未ごを絨の消息
と変ぜざる。張ハも上緊くゞざれハ下慢と云ふことあり。今京師ハ京師ハ
ゆゝしき文書を発ハされ十日の内ニ絨を捕へて京ニ送すべしと。緊しく日
数を限りの如く十日の内ニ絨を捕へ。我管内職を削らるゝにあらず必
徒流罪ハも處せられんハ汝ハ絨盗の事を掌る。緝捕使の職ハ生ハ
いんを自ら急て累を我ハ及ぼすや。我先汝を遠ハの名も往来せざる処ハ
流さんと。即流人の方ニて。何濤ハ面ニ刺して云ふハ汝ハ流罪を免

れんと思ふ。十日の内ニ絨を捕へ来るべし。期日限を違ふハ。重決して
恕すまじ。何濤ハ面ハ黥せられ心中ハ憂へ乃ち命を奉て。後院房裡ニ来る。
急ぎ京下の軍卒ハ集めて。絨を捉んと商議せ法の軍卒ハ。何濤が
面の刺を見て大ハに驚き盡く皆敬畏と為て。恰も羹の雁の嘴を穿ち鉤の
魚の腮ニ掛るごとく。敢て違ふ。一言半句も言ふ者なし。何濤ハ見ること
京ハ倍憂て云ふハ。汝ハ流人我ハ京下ハ官ハ。共に情を通ハ。稀ハも
楽を得ハ。愁を用ひ。我今日ハ疲倦ハ干て。深く考へを苦むに汝ハ
いんで死ぬとも息を出さるや。京師ハ我面の黥を見て具に懼を信さんや。
法の軍卒ハ是を聞て。京師ハ平日の
情を忘れて。此度の公事を憂へ悲ハざるんや。只是英泥黒の絨ハ必定他州他
郡の者ハて。源山瞰埜の強盗ハ。況ハ今十万貫の金銀珠玉を集ひ

丸。自〜山陳に飯て。擅に樂をなして居いたんか。豈容易られて捉へやうんや。縱彼が在處を知るとも。只後に手紙を遣るのみ〜。何濤られて呼〜ばば。今之八氏分の憂なるに。又又分の憂を添て。十分か憂然〜。乃ち使臣房を出て。私宅か内り独歎〜として。只顏嘆息もるすりて。妻氏黥と云て且歎さ且心安うして。何濤に向て云るハ。我夫何九黥を蒙り流く牧牛か流を如き。何濤か云汝いまゞ今日のことを知まず。氏殺小弟の梁中書十万貫の金銀珠玉を奈京に送て。泰山蔡太師か誕辰を賀する礼物先日すでに黄泥岡に到り。知八人の賊出来り。汝と同て礼物を奪ひ去ぬ。是に依て。氏八人の賊を名ふ捉らるべしとて。最日府尹相公我か命じく。黄泥岡の辺を尋搜さしめよ。我陸なる心を尽して。られと搜し索れども。今か於て更に賊らか生死を知ず。我心悲られと穏る不に。今日又蔡太師方る。文書到来して。

十日の内に賊を捕へ不迷。奈京か引渡さしめて。緊く命令り加。府尹相公大か怒て。十日の内に賊を捕へずんば。流罪か行へしと。先我面か刺を彫りぬ。其氏度日限の内に賊を捕へずんば。汝も永く別れ。一命も又且夕を保難しん。妻られを聞て大か嘆きくのごくんば何を以て。賊を捉へ氏難を脱れぬんやとて。夫か慈惠て居る如に舍弟何清来て何濤を訪ふ。何濤これを見て云る。汝か兄に好む博奕はなさしめて今氏に来て何の用ありや。多くハ是博奕か手輸下消を求んとて。奔走する。妻何清を見て。私か心中に怪び。賊の来歴を彼か問く。必定消息を知る仮もめんうと。別て客を誘て。何清を招て云るハ。阿叔敬て教文。先厨房に来りなへ。我一云を問て。何清これを受て別ち阿嫂か陳て。厨下か到られば。阿嫂急に酒食を

ゆけて何清を歓待。自らこれを勧む。何清酒数盃を飲て阿嫂ふ對して云
るゝへ我兄ハまゞ我を歓待ふ縱慶漢らゝいふ。本日胞の兄弟ふんば。一府ふ
列つて一盃の酒を飲ても。何の恥うわん。緝捕使の職いいなる大役ふんば已を
着ハ天の大ひなるごとくふ。人を見てい針の小さきごとくにするや。我かく接る
肉ふも。又笑ひに逼る。阿嫂ガ云。阿叔先怒を休め。汝の兄も心中ふ憂ゐて
今日をるにてをりゞし。何清ガ云。我兄ハ毎日大利を趁け。家内ふ財物のゝ
金銀米粟之何の不足して。今日をるごとくや。阿嫂ガ云。阿叔ハ知りいまゞや。
昨日美泥師も。七人東高人美一人汪賈人。擅に梁中書より来ル送
縱慶の礼物を奪れ。手紙を遂ふ武濟州府ふ頒り。府尹相公今蔡太師の
文書を以ひ。十日の間ふ賊を捕へんとの事ゝ。美十日を延ス。府尹相公も
必ず。糸ようの答めを受ゆを明ゝ。これふ依て武殺の逃捕を汝の兄ふ

命じ。ひ美十日の間ふ賊を捕へまんハ。流罪ふ處すべしとて。汝ガ兄の面ゝ。
刺を被うゆひ。黒して賊を捕ると雖ども。ふ雖後を待べし。扨ふ阿
叔の兄ハ頃日ゆゝ精神ふ逼て居ゆゝ。毛ふ依て自ら。皮き換扮もあ
まゞ阿叔必ずこれを恨ゝゆゝ。何清ガいまく。我も器ふ賊ふ成ずこと
嘆り。但しゝ。いるる捕板の賊なるゝや。阿嫂ガ云。阿叔ハいまゞ硬ふ陸
を不我今七人の東高人ガ奪ひ去ると。何清ハ笑て。何々と大ふ笑て云るバ。東氏賊ハ東高人ふ奪ふらんバ。
清兄を嘆て。何々と大ふ笑て云るバ。東氏賊ハ東高人ふ奪ふらんバ。
何ゆゝ人を弛てこれを捕へざるや。阿嫂ガ云。阿叔ハ好容易ふ捕ふ彼賊
ふを捕へきれ。ハいんどかく憂ん。只うゝむらくハ賊を捕へ。と加るし。
何清ガいとく。我兄ハ君に酒食の朋友を親へ。日胞の兄弟を疎んじ
さるゝ。今日雖後の罰ふ堪ら来て高義をなる者ハんや。美我ふ数年の

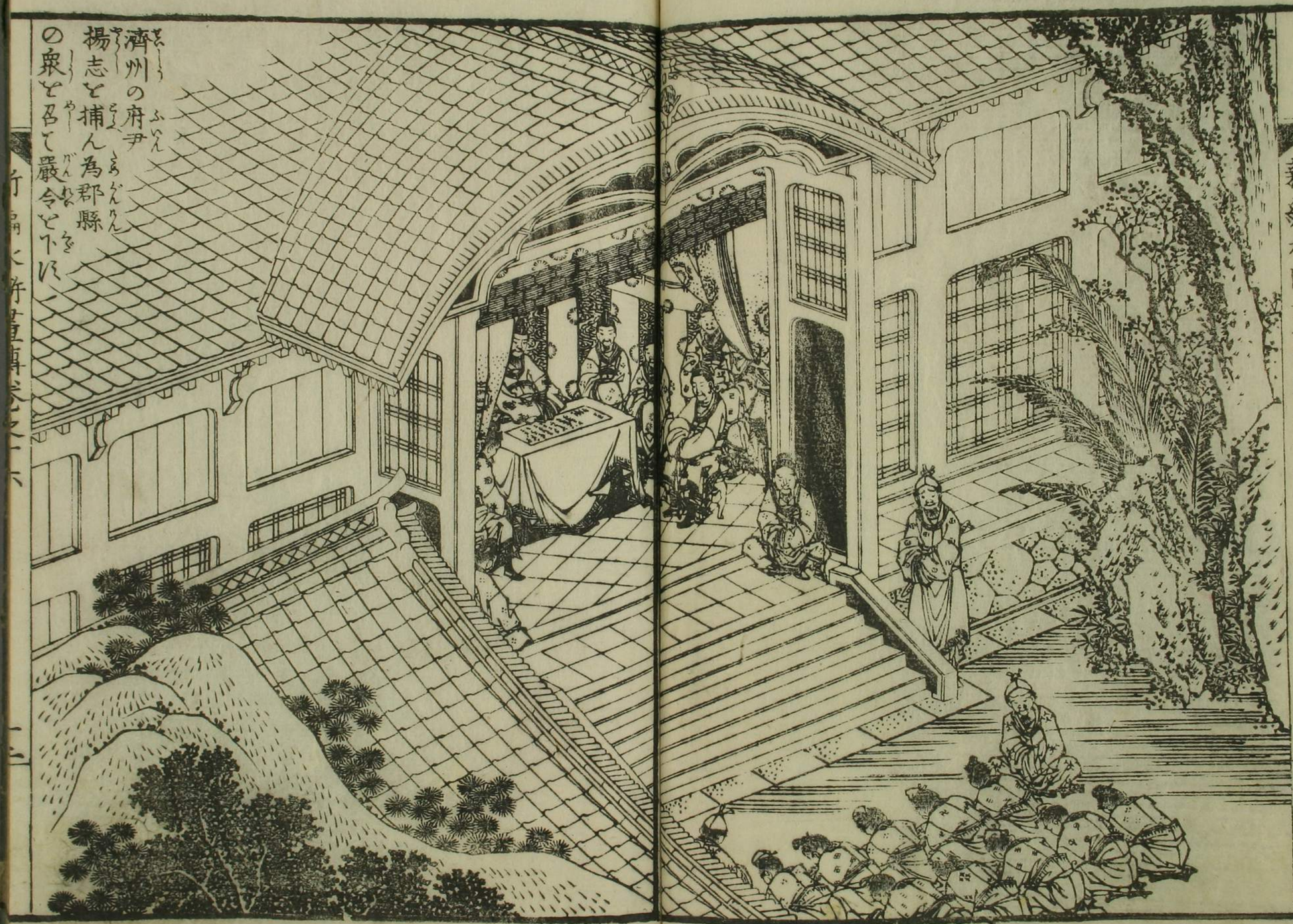
何清ハ今ハ何猥なる身なり取て奪へとなり

絨を奪へて使しめいでけハ人の絨を捕へて何の雑きくのくん阿嫂ガ云
阿叔ハ氏絨の書信を知りぬや何清ガいふく我ガ兄弟十分の危ふきに係るべ
我を時来て兄を救ふべしくくて已ホ分を起して同人とせ絨ホ阿嫂ガ云
ふ器て酒を勧ハ別内ホ入て夫何清ホ對して何清ガ云くくと詳に告
れば何清急に何清を清て對面し賢弟汝已に絨の書信を知るべ速ホ
く我ホ若ふせひ度の危急を救ふべし何清ガ云我ろて絨の消息を聞
ば我今河嫂ホ云ふせしハ戯要の言ふ何ぞ実に絨の来歴を知るとめん
我なきく急の若ふれハ兄を救ふを能ハぞ何清ガ云賢弟何ぞ旧恩を知らぬや
只我平日の好き処を挙て速に我急難を救ひ一命を保ふし
めんや何清ガ云我兄の子下ふ二三百の軍卒あて悉く皆眼明ふ手ふ枝
を若ふるに何日か我兄の為に力を合せて絨を捕へざらや我ガ敵を慶

漢明ふ人の力をかりて豈ふ兄を救ふとめんや何清ガ云賢弟何ぞ再ふ
情あさ話を云ふや汝既に絨の書信を知るべし一向兄を忘しぶ云ハずんハ他人
の為に功を棄れんふ云ハば我ひふくくば罪を蒙ふん汝先絨の行向を我に告知
めハ我必ず急く汝ホ報ぜん何清ガ云ハく何の行向を問ふや我ろ知て居ハ
何清大ひホ驚て云ふハ汝ハ我面の刺をもえつくんホいふんぞふくくれと思ふ
や月胞の兄弟ハ系来ふ兄の正汝ハ父母のことを思ひ出さべ我ガ命救ふべし
何清兄と呼て歩て云ふハ我兄必ず慌ふことふん為事十分ホ危ふく
ふくハ我自ら氏小絨を捕て兄の難を救ひやべくけとき阿嫂ガ云ふハ那くハ
阿叔速に兄の難を救ひ給へ今蔡を師の使者濟州府に立て立処小絨の消
息を伺兄を尤ひる公事ふ拠ふ汝ハ兄を小絨ふ云て共に驚くことを能
ふざんハ兄に兄弟の情ふ一性宜しくふくに絨を捕て我夫婦の憂を慰

めの人何清ゞ云阿嫂も知りのふゞく我唯博奕を好む故兄小歌さ罵られ。
幾何の恥云耳小觸れども。我これを忍んで和爭ふてなし考小汚名ある時ハ。
他人を清てこれを歎待のものゝ。一年の内仮まの日う。我小一盗の汚を飲
めの人今日代事わるゝ為て我を接のふ。も我小しも見て怪しゞび清も他
人小汚名に張り。親まい憂愁小張りゝ云てあり。我兄ハ何思ひ言を曉し
奥ざるや何清これ為て忙しく一度十貫私の百目の銀とれ出し。兄と何清
に与へていとく。賢者先代銀を收めて小費の助小せよ。後日絨を捕へ見我
物を汝に附まゞ。何清兄ゞ云て冷笑て云るハ我兄ゞ銀ハ何を我考
に博奕に輸て。十分小若しき時ゞも。一錢も求しるを見ずくゞ銀を收拾
めの人かくのごく銀を以て我を嫌しめゞ我突して絨の立所を探まゞ。
りてふ親親の清とゝて問のゞ我肯て絨の書作を為ゞ必ず銀を

出して我を驚しなゝとゝれ何清ゞいとく。我平日汝を罵ハ今く待んゞ
こ必ずこれを恨ゝとゝれゞ銀ハ官司よりの恩賞に湯りしる銀るれハ。我今
汝に見を与る。汝何ぞ見を辞まるや。別くハおく絨の立處をゝしめよ。何
清哈々と大小笑ていとく。我兄必ず憂へゝとゝれ。我ゞ七八人の絨を。
ゝ捉へく。便袋の内小收め来る。何清これを吟こ大小驚て云ゝいとく
ゝ。七八人の絨を。便袋の内ゝ收めゝるゝ。我俗に云ゝを曉さゞ。何
清ゝ云我兄これ疑ひのゝを思て先代銀を旧のごく收拾のゝ銀
を持て我を嫌しめゞ。及て絨の立處を。問のゝを怒ゝん我兄
怯く汚を飲て。言後絨の来歴を。詳に清りゝしめゝさんに。遂に
汚を出しのゝを。又汚を求めて良久しく。杳として傾けり。何清
竟に何等の流を云出しや。次の回を讀で明らめよん


濟州の府尹
揚志を捕へん為郡縣
の衆を召て嚴令を下ス

○宋公明私に晁天王を放

何清頗酩酊を催ふ不覺て。何濤乃問て云。我偖小七八人の絨を使
袋の内小收めると。云とを信ず。実に彼絨らが來歴ハ。何の處に落居る
哉。速小教ゆせ。柴大郎の心安んせ。何清答て云。実に茅日我博奕に赤輸て。
彼緒博坊に歇居る処小。又一人博奕の皮來て。我を邀て云るハ。汝今輸を
て。下稍くハ。我汝に三天百の銭を借て。小博賭なんと。城の小門
を出十天里ばかり地て安樂村と云処に。王氏の客屋に於て。小博奕を催し
多く彼村ハ本籍方より。盜絨多く湊るよしを。官司より緊く村中小觸
て毎夜彼村に泊る不の旅客盡く皆帳面に載て。乃ち帳面を村の里正
方に考へ。是を點視しむ。然るに彼王氏の客屋ハ系文字を識ざる故。我
彼に代つて凡ま月作り。牒面を写せり。る不に六月三日の夜七人の來客來

て。彼王氏の客屋に旅宿を借る故。我これを牒簿に載んとて七人を見る
を内首領と。一人の客ハ乃ち鄆城縣東溪村小於て。ちも保正の職を
晁蓋と云者。我年一人の英雄に聞て。晁蓋が家小ゆきて
我を渠を識て。後我帳面を持て。彼小が姓名を宮るに。内一人が
晁に我客が姓ハ李二今濠州より東京に來て運ぶ商人ゆて。ゆしも輕ハ
しき者にわらべと云ふて。後堂小入る。最怪しき撞棍あり。拔れた又
別に鉄ひべきことも。晁蓋に我遂に彼を帳小出載しが翌日又更の比。七人
に旅客を歩立ぬ。其日ハ猶以後。我又客屋のもと後小濠村の博奕
宿に於る不に途中に於て。一荷の桶を挑ひ來る漢子に行遇ね我東京
漢子と。儀ざりしかども。客屋のもハ代男子と知ゆて。別宮ていく。白石鳥
何れの不に去や。彼男子答て云。村中に一人の富ゆ人ゆく。一荷の酢を買べ

と。我と新れしを。今我が二桶の酢と。彼村に運ぶと云て行るを。客屋の主我が小若と云。彼桶と荷のる漢子が名は白日鼠白勝と云。博奕の老賭徒。他日彼を招くべと。酒りるが。後黄泥岡に於て七人の来商人をうべに一人の酒賣翁汗衫を脱て。人と痛め麻末うし。遂に十万貫の誕辰の礼物。金銀珠貝を棄ひ紅るると。ちく方くに沙汰ありこと。我是を聞ふに。七人の来商人と云は。恐らくは晁蓋以下の七人ならん。まと一人の酒賣と云忍を白勝なるべ。手段あいんぞなれば。彼宿に酒と運ぶと云るて。手桶ハ郷て馥々と酒の香めり。酒と作て酢と云ふハ。豈手段ふ一物なるらんや。今茅白勝を捕て拷問せば。賊の来歴を速知れいん。何清是を聞て大ふ驚び。即日金牙何清と共に。濟州府ふ来て府尹に対て。何清ふ謂て云。此度の盗賊いかぐ来歴ありや。何清答て申るハ。今日已ふ頗消息あり。府尹聞て大ふ驚び既に消息あらば。宜く後堂ふ入て。密議せとて。刑後堂に呼入て。これを宿られば何清一々詳に手来歴を述ふ。府尹是を聞て既にかくあらば。先白勝を捕ふべと。刑八人の軍卒を何清ふ添て。安楽村ふ遣し。彼宿屋の主と棄因者として。直に白勝が宅ふ地する。此時夜已に三更の尤例して。白勝夫婦ハ熟く睡り居る処ふ。大勢の軍卒ふ一度に門を打破て。家内に擁入り。杖て白勝を把て床より下に拖り墜し。遂ふ縛ふて縛る。白勝天ふ驚き地ふ怖れ。忽ち面及去のごとく成て。法人ふ対して云るハ。汝らハ何なるれば。かく狼藉をるや。軍卒罵て云。汝黄泥岡ふて金銀珠玉莫太の財棄紅飲まで好とを。是ふこれを忘るや。白勝これを聞て。乗こと抵抗られ。軍卒ふ又手素と絆て。これふ官ひられを。又只顧抵賴申る。諸軍卒ふ云るハ。何ぞ問るや及

ちん。速に家内を搜し。被おが流るしる金銀を見て出せとて。一所にあつめ下し。方々と搜しる処ふ。床の下ふ凹き処あり。これ。法人見を疑ひ。代処を二三尺許掘るに。果して一包の金銀を穿出しぬ。白猪見を見て騰と蹶し。縄を散し。大ひに襲れ慄きる。軍卒ふ被金銀を。白猪の頸ふ捆つけ。書を共に。濟州府より立縣を廻る。已ふ夜の更の時分。濟州府に至て。乃ち白猪夫婦を廳前ふ引出し。時府尹城の梯梁を宿れども。白猪夫婦曙く包んで。主人を供ざりしが。府尹大ひに怒て。汝何ぞ見を抵賴や。已に首告のためのて。城の梯梁ハ鄆城縣東溪村の晁蓋なりと。汝尚敢てこれを偽らんや。速に拷六人ごとを供ぜんハ。厳重の拷問せんとて。遂に左右に命じ。白猪を二十棒おせられば。忽ち皮肉破れ。血流れ地ふ溢る。府尹又作て云る。晁蓋ごとハ已に首告あてこれを拷へし故。なぜ捉捕をきぬ。汝いんぞ彼六人ら姓名を供ざるや。やり白ずんハ今代上ふ又疾く二十棒をおん。猶しハ汝は眼ふ代に死せん。猶しハ又妻も見ふ例せん。白猪代上棒一つも受ること能ハず。遂ふ白状せしハ代度七人の賊。主人の魁ハ乃晁蓋ぞ。餘の六人ハ。朱仝代始て英泥岡ふて。出会しの。ふて旁て主人名を知りハ代。朱代何も既詐不ふ。代。府尹が云汝実に彼六人を知ぬ。共晁蓋を捕へるハ。六人の在所ハ立所に分明をんとて。乃ち二十斤の死罪の頸枷を白猪に加へ獄中に。妻も同じく鎖を流郷。女牢に入る。代日又一封の文書を何清ふ与へていく。汝ハ急ふ軍卒及び和糸の虞候を人を引て。鄆城縣に到り。刑文書を知縣ふ見せよ。立所に晁蓋等に彼六人を捕へ来る。必ず賊を走しなるとて。何清命を承て。ふ速健る軍卒二十人

を従へ。又彼女人の虞候を捉て壺小郡城小弛る。何清弦人を縛て云
ふ大勢一度に騒しく縣裡に入らば。絨必ず見を知覚て。急に逃去らん。
汝ら速く酒店小入て待べし。我先女人の軍卒に文書を持せ密に縣裡
小弛。乃知縣にまゐへて。立所に鼎蓋を捕ふべし。弦人これを聞て独り
とはしられば。何清遂小二人の軍卒を具して。悄くに縣裡小入。已
に知縣の門前にいる時。已に巳の刻斗なり。時小知縣ハ朔の衙を受
早り。門前静にして原告被告小の事も。悉く退散し。一人の衙吏
人も見えざるなり。何清乃ち傍の茶坊小入て茶を喫し。乃立小宮を云るハ。
今日ハ何事も知縣の門前ハ衙吏人も来ばかく溢るゝ。を怪ていく。
今日ハ知縣相公朔の衙を受早りなり。弦の役人及び衙差の族も
急皆早飯を吃せんが為。皆く宿所に帰りし後。遂付又出来りはん。

何清再び問て云。今日の禽直小押司の職とるべ。ハ誰なるぞや。是已小
答へ云ふ。忽又対面の方を指て云ふ。今日の禽直を勤る押司ハ朔
今向ふ来る人。何清られとるに眼ハ龍鳳のごく。眉ハ蛾蟷蟷小似り。
滴溜々として耳に珠を垂。明皎々として双睛に漆を点ず。唇方ゝして。
口正し。鬚ハ落く長りして腮に繞。坐定る時ハ虎の相のごく。走り動く時ハ
狼の形小似。年の比ハ三十許りて。万人を畫ひ濟ふの度量を有ち。身
の丈六尺ばかりにして。海を掃ひ除の心機を懐く。志気堂々として威
風凛々たり。氏押司ハ乃ち是姓ハ宋。名ハ江。字ハ公明と号す。三祖相続
て。鄆城縣の宋家村に居住す。人面の及恵く。身の出矮き故。人
ミな黒宋江と呼ぶ。且又孝に於て大孝を行ひ。義人とも義を
尚び利欲を軽ぶ。是小依て人皆孝義黒宋江とも諢名せり。上に一人

の父あて。母ハ孚世一。下に又一人の弟あて。名を鉄扇子宋清と号ス。此宋清ハ原来官府に仕ゝ。刑父宋太公と倶に家に在て。農作を業ス。兄の宋江自ら。郓城縣に在て。押司の職をなし。文筆に亜ぐ。弟て武藝に達ス。平生ハ天下の豪傑と交りを結ひ。人あり。彼か家に来る時。必ず請下とあく。ゆて家内に逗留て。空く抱を加ふ。人を来る人再び司〻と欲するハ。多く盤纏を与へて。これを恵む。然に金を尽てハ。塊の如く思ひなせり。為死人あて。棺槨をも調ゝ。老ハ速棺を恵て。是を葬らしむ。人の性命を救ひ人の危急を助く。是故に名。山東河北等の地ハ。人又及時雨宋江とも呼へて。人又及時雨とハ天より降る時雨の如く。旅方物を救ふを比喩ふ。此時宋江ハ一人の家僕を従へ。縣前に到る。而に何清乃ち出て。宋江を招き迎乃ち呼つて云ふ。押司先茶坊に入ひて。茶を飲ひ給へ。宋江彼人を見に。軍友の来りしか。壮〻礼を還して云ふ。是下ハ。いまだ来ハ。何清云。押司まづ茶坊の内に入ひ。茶一盞を官事あり。宋江云。老容の一官をもとめ。茶敢てこれを茶んとく。刑家人とつ茶に茶坊の内ハ入て。坐已に定りぬ。宋江先官を云ふ。老容の姓名ハ。何清答ていく。濟州府の緝捕使何清と云ふ。宋江押司の名姓を名ハいかん。宋江答て茶ハ何清と呼て。即ち跪て云ふ。茶大〻押司の雷名を呼及ぶ。此恨〻ハ。縁をもとめ。遂に謁を下風に取こ。今日初て尊顔を拝す。是小拉玉換。宋江又新礼を乃ち遠来の客なれ。再三何清を強て客府を儀。宋江ハ自ら下つて。茶に就。茶すでに二三種吃し。宋江先何清に問て云ふ。

何公氏所に係るハ定て公事あり。何濤ゝ云。尤大ひなる公事
ハ偽て云ひし之。宋江ゝ云ふ〳〵ハ絨情の公事ゆゑ。何濤が云実後。
別濟州府よりの文書を携来れり。那〳〵ハ押司宋が為にこれを辨ず。宋
江ゝ云何公ハ郎文書を携へ来ひて。上司よりハ殺人ゆゑ。緩
やさんや。ゆゑ〳〵いふる。絨情少ひなを。何濤が云押司ハ皮府の殺人ゆゑ。強ま
ひ事ともゆゑ。ゆゑ〳〵ゆするとも。ゆるすとも。武成の公事ハ。濟州
府の牢内黄泥岡ふて八人の絨七人ハ悪商人ハ飛と変。一人ハ酒賣に分と糟ひ。
彼ハ東大名府の梁中書より東京ハ送る〳〵の十万貫の金銀珠貝を奪
ゆんと圖り。別影汗某の酒を用ひ。押貨及び痢藥軍。紛て十武人の者
を痛め。遂に十一擔の礼物を〳〵くこれを奪ひ。今彼酒賣白猪と云ふを
捕へ緊く拷問せ〳〵ば。白猪堪へに白状して。七人の絨を供るに。彼て

南所に歳ゆ。今蔡太師より。十日の内に絨を捕へて。東京に引渡ほと。
厳密の命令下つて。時侵已に濟州府に届ぬ。立所に絨の書状を呼ん
と欲ひ。那〳〵ハ押司官司のゆに。公を用ひ東京ハ小力を戮せ。宋江ゝ云。
蔡太師の文書。さて急假令。皇下自〳〵の文出を下しゆゑ。豈敢ゝ力を
用ひざるんや。但ゝ〳〵彼白猪が供る七人の絨が姓名いかんぞや。何濤ゝ云
絨首が名ハ乃遠近小耳れる。東溪村の晁蓋ゆゑ。此外六人の姓名を知ず。押司ゆゑ公を用ひて。これを捉捕ハしめゆ。宋江ゝ云大
小孩ゆ。公中恐ひる晁蓋と我と。兄弟ゆゑ。ゆゑ〳〵ゆ。ゆゑ〳〵ゆ。ゆゑ〳〵ゆ。
彼いんぞゆる大罪を犯ゆる。我ゆゑ彼を助けゆんぞ。彼後に皮司のゆに
捕へ。ゆゑ性命を迷ゆ。我何とぞ汗を出ゆ。急に逃さんと思ひ乃若て
云ふハ晁蓋ハ〳〵と陽人を假る使人ゆゑ。人者ハ彼を捕る若ゆゑ。

濟州の緝捕使河濤
土兵を弛て
白勝夫婦を
擒へしむ
新編水滸畫傳卷之十六
十六
新編水滸畫傳卷之十六
十七

果して かくのごとき大罪を犯したるゆゑに好漢に天罰を蒙むるべし。何濤云。
然るに押司急に車を引ひきぬんや。宋江が云ふ車扨めて易し。恰も麗乃
裏ふまでを入て鬢を探りたれば。拔れたる一つの車なり。何云今携へ来りぬ人
文書は親自これを衣府ふ持参し来へ拔くべ衣府ふ送捉捕人を遣はし。
晁蓋を捉へやらるべ。そ書は素も陸分力を竭しやさん此後の云事尋ね
の云事と笑ふべ。必怪しく沙汰しぬて車を漏しぬとなん。何濤云。押
司の言ふ明うして。然るに押司素をうて知縣相公ふ遇へぬ。宋江が云知縣は
朔の俗へ事を呼ろて大ひに怒れ怪く先歌んぐ来れるが。未だ起やらる
ぬ。何云はず宜しく。此所に片時待ぬ知縣廳上に出られいで素ふ送来て
何云を迎へやべし。何濤云。偽て押司を新ふ宜く攬捉を加へぬ宋江云
把の尚猶ふる所何を恭三命じぬに及ばんや素は先私宅ふ帰てかしこを用

事を完へ来りさんふ乃ち所ふて待ぬ遂に別れて。茶坊を出。彼つ茶に
待せ置る家人ふ命じて云るは汝は知縣公廳上に出ひぬと呼るべ。
ふ速かの茶坊ふて。彼家人ふ告て云べきは押司は少須臾くべきに少くお
待ぬ。て宜くあるべしとて。そ身は急ぐ。私宅に地帰り。自る槽
ふ出て行を牽出し乃後門の外ふ見ふ歩行て。城の東門を地あるを
飛せ忽ち茶溪村へ跑来りいまだ未時も及ばざるにそ晁蓋を敲ふ到り
見ぬ尚日晁蓋は呉用公孫勝劉唐等と共て後園の葡萄架の下に席
を設け酒を砂樂を作り但し三阮兄弟は已に金銀を派分して自る石碣
村ふ回りぬ晁蓋は酒已に與ふへて見える所に忽ち家人来て報して云。
宋押司急用あて呼おに参りぬ晁蓋問て云幾何の人従ひ来れり
や家人が云只独るを飛せて跳来りぬ急に保ふに遇へさに早く告て

公孫勝ハ大高ノ色白ク好男子ナリ能ク道術ヲ修ス後ニヲタヲタアフ西ノ人ナリ

曰く晁蓋兄を呼び急ぎ事あらんと忙しく出て宋江を迎へられば宋江劉晁蓋うまを携て宋家に入り坐已に定まれば晁蓋先づていとく押司今何の急事あてて彩忙しく一騎馳に来りぬ宋江答て保正と兄弟よりも親しき心腹の朋友なり故に我一命を捨て馳せ来り劉保正の禍を救ふ保正必ず心ふ完べし今既に黄泥岡の事発れ白勝老早ふ擒られて濟州府まで拷問を被り已に保正ふ七人を供ふる由濟州府の皮軍ふ蔡太師の命を受て今朝鄆城縣に馳来り乃ち保正ら七人を捕へんとして保正を捕て魁とし天子に代事先我を以て揖捕せ何濤を哄つ柔坊ふ待せ重急に召を発せて馳来りぬ古より三十六計走を上計とせり。保正迷に走り変疑惑逆深ふ及ぶ。禍立ちふ及べ柔ハ先立版て彼何濤を引て。知縣に遇たもべ。孫ふ少刻捉捕の者大勢来べ。孫

急に蔵行ひ必ず一刻も延引ふ晁蓋兄を呼大ふ驚き乃宋江に報じ汝に好も若ふ者多。宋江に例して云るハ足下の大恩実に都ふ及ぶ保正迷に走り変疑惑逆深ふ及ぶ柔ハ先立版て宋江云保正多く言ぬ内に牧捨て走りの柔ハ内版りヤさん晁蓋又云我ふ七人の内阮小二阮小五阮小七と云三人の兄弟已に金銀を分取て自ら石碣村の居ふ版りぬ此外三人の若者我敏ふあり押司先彼ふ村面談しに入て後園ふ晁蓋急に三書を指して宋江ふ告て云一人ハ呉学究と云て南北の人。一人ハ公孫勝と云て蘇州の人。又一人ハ劉唐と云て高密州の人。宋江忙しく彼三人ふ向て一礼を致して別を告。尚再三晁保正ふ家内を牧捨て走り変柔ハ早版りとて尋べる小跳奔逃柔に縣裡ふ馳行り。晁蓋ハ各に対して今此所に到て対面しる人を

彼人ハ吳用ガ云ヒ来リテ彼人ト識ル事ヲ云ヒ慌忙ニ回ラントスルヤ。
晁蓋ガ云ヒ給ヒシ如ク彼人ハ我寨ガ命ハ忽チ休ムベシ。
三人大ヒニ驚テ此度ノ事如ニ漏ルヤ。晁蓋ガ云ヒ宋押司識ル一命ヲ拝辞
来リ。乃チ我ヒ須臾ニ仇恩ヲ莫ラン。豈料ンヤ。白状已ニ捉ヘラレ。今濟
州府ノ獄ヒ繋ル。彼遂ニ拷問セラレテ。我寨七人ガ事ヲ白状セラレ張ル。
乃チ濟州府ノ緝捕使。何清ト云ヒ蔡太師ガ命ヲ受テ差干ノ軍士ト
復ヘ今朝已ニ鄆城縣ヒ到ル。忽チ我寨ヲ捉ヘント欲ス。宋押司来リ
先ヒ事ヲ告ル。何清ト誑テ茶坊ニ待セ置ク乃チ飛ビ出テ急ニ跑来ル再
三我ヲ探メテ走リ出ヘト偽ル。最少刻の内ニ捉捕の人我宅ニ来ルベシ。
まさにこれいかんぜんや吳用ヲ云ヒテ大ヒニ感嘆シテ云ヒ彼人来テ告ズ
んバ我軍ハ天の網ヒ掛ルベシ。彼人ハ彼ニ我寨ガ為ニハ再生の恩人ト

保正ハ彼人ヲ称シテ宋押司ト云ヒ宋氏の人ヒ云ヒ晁蓋
ガ云ヒ彼人ハ呂尚縣の押司。宋江ト云人ヒ久シク宋江の大名ヲ
聞シ。緣ヒ有テ。現在天の地ヒ居ル。未ダ名ヲ対面セズ。公孫勝聞テ
ひとしく云世ヒの人皆及時雨宋公明と云て挙ヒ尊ブハ彼人のことなり
也。晁蓋ガ云及時雨とハ別宋江の事ニ。彼と我とハ本来義ヲ結ビ兄
弟の盟ヒ約ヒ。ヒ。これ今日一命ヲ助ル。彼に感激に堪ヘ。ヒ。
ヒ。活命の恩義ヲ銘ル。牧ヒ忘レ難シ。又吳用ハ宜テ云
我寨事已ニ危急ヒ迫ヒ。計ヲ以テ此場ヲ脱レンヤ。吳学究云ヒ
保正何ヒ別ヒ議ヒ。ヒ。三十六計走ヲ上計ト云ヒ。ヒ。ヒ。逃
ヒ走リ去ヒ晁蓋ガ云今宋押司ヒ。已ニ去リ出ヘト。徐メラレタ我未ダ去ラ
ズ。吳用ガ云我已ニ思案ヒ設ケテ公中ヒ有リ。都内の財宝を收

拾て。六七荷の撻ふ作り乃ちこれを家人ふ撻はせて。一度にお出ふ石碣村の三院が方に落行べし。晁蓋が云三院は系漁夫の住居て舎も窄うんぢれい豈ろく我寨大勝と安んぢ寄るとを汚んや。呉用が云保正はいまだ妻子く幼りなまじ。彼所ろうは梁山泊ふ近し。梁山泊の陣寨は今大に繁昌。縱ひ千軍万馬と向て攻るとるおしも恐るとを。我寨の一度司の觸て。隙く捜されば果して石碣村ふ流れ居るとを。絶はぜんい歩て彼山陣に入て彼等が商ふ加ゆ。晁蓋が云此計我心ふ合へり。然れども呉恐くは王倫ら我寨を山陣に留まりさせもめんん。呉用がいちく我寨今多辺にあるもの八金銀ふ多くこれを送て。彼們に与へなば。慎で留るとめるべし。晁蓋が云既ふかく商議お定る上は。事遅き為べうぞ。呉先生はまづ劉唐とともに。家人に撻を挑させ。急ぎ三院の方へ行き。我は乃ち公孫先生と渡り来べきなり。早く行れ出て。お迎へ。呉用これ聞て。彼と因

彼奪取る誕辰の礼物金銀珠玉悉く收拾て。又六撻の撻ふ作り乃又六人家僕にこれを挑させ呉用劉唐各朴刀を提げ撻子を監押し。総て十余人。遂に晁蓋が飯を打出て石碣村へぞ急発ぢ。晁蓋は又公孫勝と家門を元拾て。諸事悉く完了れば。家人の内又九人にあるんと。那ふ去る多く後費と与へて問しめ。寄作の家人ふ。撻子を荷を。歩出べしとて。既ふ中堂に火を放ちれば忽ち猛火熾ふ焚昇り乃ち

巳所目録の次美髯公朱仝插翅虎雷横天王を放と云を後ふ流れ文と来後の差あり。冠山子の譯通俗の本ふ見を改正して。お尚ふ書り。巳書も又最後の序を改

新編水滸画傳卷之拾六